

失った唯一の特ダネの機会

青木 徹郎

「政治家は政治家のまま死ぬのが、一番いい」と時折漏らしていた大平さんが急逝されてから、早くも半年余りが過ぎ去った。「おとうちゃん」と仲間内で、呼び合っていたほど親しみを感じさせた大平さん。あの象のように細い目をした、やさしい笑顔には、再びお目にかかることはない。

思えば十三年前、私が、政治記者として、まだ駆け出しの防衛庁詰めどころ、大平さんの側近で今は故人の浦野防衛政務次官（後の労働大臣）から、「いずれは総理・総裁になる人に会わせよう」といわれて、NTVの三箇記者と連れて行かれたのが、瀬田の大平さんのところだった。その時の印象は、取っ付きにくく、無愛想な感じを受けたが、それでも、われわれと談笑していた時に見せた笑顔には、何か親しみを感じさせるものがあった。その後は、大平さんが、前尾さんから「宏池会」の会長を引き継ぎ、また、私も「宏池会」の担当になったことから、足繁く瀬田に通った。特に、四十七年のポスト佐藤、四十九年の「田中退陣」、五十一年の「三木降ろし」などの政変時には、朝に晩に、それこそ四六時中、大平さんと会っていたわけで、実の父親以上に、一緒に過ごした時間が多かったのではないかと思う。大平さんに、会えば会うほど、初対面の印象とはちがひ、その人柄や見識、造詣の深さに、私も感服すべきことが多かった。

四十九年十一月末、当時の田中首相が、金脈問題の責任をとって退陣したため、その後継者選びをめぐる、自民党内が「総裁選挙か話し合いか」で、田中・大平両派と三木・福田・中曽根三派とが、激しく対立したため、

政局は激動していた。このため、私も含め各社の大平番も、他派閥の担当者同様、朝早くから夜遅くまで、大平さんやその周辺の取材に当たっていた。

十一月二十八日、この日は党内の対決状態を打開するため、椎名副総裁による調整工作が行われる日だった。私は、例によって午前七時過ぎから大平さんのところにお邪魔して、二人だけで朝刊やテレビを見ながら食堂で朝食をとっていた。その時、傍の電話がなったが誰も電話に出る様子がないので、私が受話器をとった。電話は三木さんのところからだった。そこで受話器を大平さんに渡した。当時、三木さんは、大平さんを田中元首相と同様の金権政治家だと暗に批判し、また後継者選びは椎名副総裁による調停工作に任せ、実力者同士の談合はあつてはならないと主張していたこともあつて、三木さんが自ら電話をかけてきたのには、いささかびっくりした。大平さんがどのような受け答えをするか、それとなく耳を傾けていたが、大平さんは非常に丁寧に丁寧に対応されていた。電話が終わると、大平さんは私に「青ちゃん、これから三木と会つが、内緒だ」と口止めをした。

やがて次々と他社の連中が現われたので、しばらく懇談に同席してから、私は、大平邸を一足先に後にした。その後、各社の大平番が、記者クラブにぞろぞろと戻ってきたので、様子を聞いてみると、大平さんに裏口から出られてしまい、まかれてしまったということだった。この時、南平台の三木邸の一隅で、三木・大平会談が行われていたのだ。私は、わが社の三木番にそれとなく当たらせしたが、表沙汰にたくない三木側からは、確認する術もなく、私も大平さんとの約束があり、やむなく原稿にするのを断念した。こうして大平番を担当して以来、唯一の特ダネの機会を失った。あの時点で、三木・大平会談が表面化していたら、当時の政局も変わっていたかも知れないと思う。ほとぼりがさめた時、何時か、大平さんから三木さんとの会談の中身を聞いてみようと思っていたが、もうその大平さんもこの世を去ってしまった。